

*S. Iwanoto*

神学と人文（大阪キリスト教短期大学紀要）第28集 1988年12月発行 抜刷

ジョン・ウェスリの神学的遺産（I）

—信仰義認論をめぐる(1)—

岩本助成

る。ロゴスとパトスの二元論という枠組みをいち早く克服し、<sup>(3)</sup>「人間と社会とを全体的に把握し直している神学」を樹立したとも評価できる。

例えば、150編から成る『説教』を読む時、(彼の書かれた説教は、4万回にのぼる実際に行われた説教に神学的内省がくりかえし加えられて凝結したものである。)40万キロ以上を旅しつつ伝道した実際的な状況を想起せざるを得ないが(つまり、ウェリスがそこで出会った生身のままでの人間と、社会的現実そのものへの福音の呼びかけが『説教』なのだが)、同時に、ウェリスの神学的思考エッセンスの発見にもつながっていく。彼は説教において、神学的に重要なテキストとテーマとを採りあげる。それらを民衆がよく理解できる平易さで説く。難解な神学的内容を、彼独特の知識と洞察とユーモアとで解きほぐしていく。その論理的構築力と説得力とは見事なものである。

彼の神学的非凡さは、単に『説教』や『聖書注解』や『神学論文集』においてのみならず、『書簡集』、及び、刻明な神学的内省と人間や社会の観察記録としても貴重な『日記』にも、また、群れへの産みの苦しみを示す『メソジスト協会会議録』にも明示されている。

「礼拝の神学者」としての真面目は、彼と弟チャールズとが共同で作詩した7千編にのぼる聖歌や公私集に見られる。<sup>(4)</sup>『メソジスト讃美歌集』(1780年)が「小型の実践神学書」と呼ばれたことも、聖書の福音的真理がそれによって「歌う会衆」の中に浸透していったことも容易に理解できるところである。そのほか、彼が編集した『キリスト教叢書』などは、いわゆる「チャップ・ブック」<sup>(5)</sup>が流行した近代イギリス大衆文化における地道な啓蒙書の代表作であった。多方面にわたる指導書や入門書の類いは、彼の多才さだけでなく、民衆の啓蒙に向けての彼の並々ならぬ意欲と関心とをうかがわせる。彼が「月刊誌」という新しい型の刊行物を開拓して、信徒の教理的、実際の指導を目指したことを知る人は、今日、どのくらいいるので

あろうか。

以上の諸点は、もしわれわれが神学の世界に、「民衆の神学」、「全人と全被造を相手とする神学」、「ロゴスとパトスとの調和と一致における福音的神学」、「霊性の神学」、「いやしと健やかさの神学」などという新しい視点や内容を加えて考え始める時、改めてウェリスの神学的知識の広さ、神学的洞察の深さ、実践的応用の鋭さに瞠目させられるであろう。人の行動や実践のすべては、その人の品性、思想、理論を背後に秘めている。従って、神学なき教会的実践などは考えられない。ウェリスの伝道、牧会、教育なども、決して単なる思いつきの類いでなく、行き当たりばったり式のものでもなかった。あくまでも聖書に立脚しつつ(彼は「一書の人」であった!)、教会の、古代教会、中世、改革期を経た伝統に養われ(彼は同時に、「万巻を愛読した近代的教養人」であった!)、彼独自の神学を形成していた。

聖書の福音への信仰を核としつつも、他方において伝統の豊かな価値と、賜物としての経験や理性の重視を忘れなかった。その福音的信仰復興運動や、今日に至るまでのメソジスト神学の脈々たる伝統の流れは、熟成した彼の神観、キリスト論、創造論と人間観、聖霊信仰と救済論、教会論と終末観などと配列できるものを、基盤としてこそ初めて進展もし、継承されてきたものなのである。豊かな神学思想と多方面への応用性を宿したこの人物は、われわれの側でも、より豊かな神学思考とより多様な応用力とで彼を受けとめないかぎり、その正しい評価につながっていくことはあり得ない。

今日の教義学的労作には、必ずしも従来の教科書的枠組みに収り切らない、問題意識を持ち、方法論を駆使したものが少なくない。<sup>(6)</sup>その上、成熟しつつあるエキュメニカルな神学的共同作業は、今日の神学者たちを、特定の教派的伝統から世界教会の共通財としての多様な神学的遺産の共有へと向かわせている。<sup>(7)</sup>このような時期においてこそ、激動の時代に多様な価値観を包容しつつ、しかも聖書の告げ教える福

*S. Iwanoto*

神学と人文（大阪キリスト教短期大学紀要）第28集 1988年12月発行 抜刷

## ジョン・ウェスリの神学的遺産（I）

—信仰義認論をめぐる(1)—

岩本助成

# ジョン・ウェスリの神学的遺産 (I)

—信仰義認論をめぐる(1)—

岩本助成

## I 予備的考察

### 1. 神学者ジョン・ウェスリ

本論に入る前に、二つの予備的考察を試みておきたい。第1点は、ウェスリを神学者として評価するという点に関してであり、第2点は、ウェスリ神学の中心思想、つまり、核心部分についての考察である。

ジョン・ウェスリのことを第18世紀における福音的信仰復興運動 (Evangelical Revival) の偉大な指導者と位置づけない者はいない。メソジスト運動の創始者であり、その組織をつくりあげた天才であると評価する人々も多い。しかし、彼を同時代にあっての、すぐれた神学者と評価することに対して、ある人々はいささか逡巡を覚えるのではあるまいか。

ジョン・ウェスリを、同時代にあってのすぐれた神学者と評価するか否かの論議に加わるためには、その人自身がいくつかのチェック・ポイントを通っている必要がある。①ある程度の教会史的、神学史的知識を有していて、ウェスリをめぐる歴史的、神学的思潮を把握していることが必要である。②第18世紀英国を中心とした社会的、思想的、神学的状況について、ある程度の知識を持っていることが求められる。③研究者自身がジョン・ウェスリに関して第1次資料による研究を試みていることが大切である。少なくとも、彼の主要な説教を最新の校訂版<sup>(1)</sup>によって精読していることが願わしい。④「神学とは何か」をめぐる今日の論議は、「神学」そのものの定義がますます広汎にわたり多

様さを増していることを示す。従来、いわゆる、神学についての標準的な定義という枠組みを越えた自由闊達な見識が必要である。以上のポイントをふまえた上で、初めて、ウェスリを神学者として評価する業に加わる条件が揃う。以下では特に、上記の④のみについて述べてみよう。<sup>(2)</sup>

確かにジョン・ウェスリは浩瀚な組織神学書を遺していない。トマス・アクィナス (Tomaso d'Aquino, 1224-74) の『神学大全 (Summa Theologica)』や、ジャン・カルヴァン (Jean Calvin, 1509-64) の『キリスト教綱要 (Christianae Religionis Institutio)』、あるいは、カール・バルト (Karl Barth, 1886-1968) の『教会教義学 (Die Kirchliche Dogmatik)』などに比する組織神学の大冊を著わしていない。従って、第一級の神学者を『スンマ』的教義学の著述家のことと定義するなら、彼はそのような類いの神学者ではない。また、筆者は、ウェスリの『聖書注解 (略注)』をマルティン・ルター (Martin Luther, 1483-1546) の『聖書講解』と比べて論じるつもりはない。あるいは、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430) の『神の国 (De Civitate Dei)』のような歴史哲学的洞察に満ちた書物も、ウェスリには見当たらない。

しかし、反面、ジョン・ウェスリには、近代への大転換期に立ち、伝道や牧会を中心にした多様な活動で結晶し、沈澱し、精錬されていったユニークな神学創造の業があった。新しく多彩な「聖霊の神学」、「救いの神学」、「説教の神学」、また「教会と礼拝の神学」の誕生であ

る。ロゴスとパトスの二元論という枠組みをいち早く克服し、<sup>(3)</sup>「人間と社会とを全体的に把握し直している神学」を樹立したとも評価できる。

例えば、150編から成る『説教』を読む時、(彼の書かれた説教は、4万回にのぼる実際に行われた説教に神学的内省がくりかえし加えられて凝結したものである。)40万キロ以上を旅しつつ伝道した実際的な状況を想起せざるを得ないが(つまり、ウェリスがそこで出会った生身のままの人間と、社会的現実そのものへの福音の呼びかけが『説教』なのだ)、同時に、ウェリスの神学的思考エッセンスの発見にもつながっていく。彼は説教において、神学的に重要なテキストとテーマとを採りあげる。それらを民衆がよく理解できる平易さで説く。難解な神学的内容を、彼独特の知識と洞察とユーモアとで解きほぐしていく。その論理的構築力と説得力とは見事なものである。

彼の神学的非凡さは、単に『説教』や『聖書注解』や『神学論文集』においてのみならず、『書簡集』、及び、刻明な神学的内省と人間や社会の観察記録としても貴重な『日記』にも、また、群れへの産みの苦しみを示す『メソジスト協会会議録』にも明示されている。

「礼拝の神学者」としての真面目は、彼と弟チャールズとが共同で作詩した7千編にのぼる聖歌や公私栞集に見られる。<sup>(4)</sup>『メソジスト讃美歌集』(1780年)が「小型の実践神学書」と呼ばれたことも、聖書の福音的真理がそれによって「歌う会衆」の中に浸透していったことも容易に理解できるところである。そのほか、彼が編集した『キリスト教叢書』などは、いわゆる「チャップ・ブック」<sup>(5)</sup>が流行した近代イギリス大衆文化における地道な啓蒙書の代表作であった。多方面にわたる指導書や入門書の類いは、彼の多才さだけでなく、民衆の啓蒙に向けての彼の並々ならぬ意欲と関心とをうかがわせる。彼が「月刊誌」という新しい型の刊行物を開拓して、信徒の教理的、実際的指導を目指したことを知る人は、今日、どのくらいいるので

あろうか。

以上の諸点は、もしわれわれが神学の世界に、「民衆の神学」、「全人と全被造を相手とする神学」、「ロゴスとパトスとの調和と一致における福音的神学」、「霊性の神学」、「いやしと健やかさの神学」などという新しい視点や内容を加えて考え始める時、改めてウェリスの神学的知識の広さ、神学的洞察の深さ、実践的応用の鋭さに瞠目させられるであろう。人の行動や実践のすべては、その人の品性、思想、理論を背後に秘めている。従って、神学なき教会的实践などは考えられない。ウェリスの伝道、牧会、教育なども、決して単なる思いつきの類いでなく、行き当たりばったり式のものでもなかった。あくまでも聖書に立脚しつつ(彼は「一書の人」であった!)、教会の、古代教会、中世、改革期を経た伝統に養われ(彼は同時に、「万巻を愛読した近代的教養人」であった!)、彼独自の神学を形成していた。

聖書の福音への信仰を核としつつも、他方において伝統の豊かな価値と、賜物としての経験や理性の重視を忘れなかった。その福音的信仰復興運動や、今日に至るまでのメソジスト神学の脈々たる伝統の流れは、熟成した彼の神観、キリスト論、創造論と人間観、聖霊信仰と救済論、教会論と終末観などと配列できるものを、基盤としてこそ初めて進展もし、継承されてきたものなのである。豊かな神学思想と多方面への応用性を宿したこの人物は、われわれの側でも、より豊かな神学思考とより多様な応用力とで彼を受けとめないかぎり、その正しい評価につながっていくことはあり得ない。

今日の教義学的労作には、必ずしも従来の教科書的枠組みに取り切らない、問題意識を持ち、方法論を駆使したものが少なくない。<sup>(6)</sup>その上、成熟しつつあるエキュメニカルな神学的共同作業は、今日の神学者たちを、特定の教派的伝統から世界教会の共通財としての多様な神学的遺産の共有へと向かわせている。<sup>(7)</sup>このような時期においてこそ、激動の時代に多様な価値観を包容しつつ、しかも聖書の告げ教える福

音の真理のみに集中していったジョン・ウェスリのような人物を、神学者として再発見せねばならぬと筆者は考え続けている。

## 2. ウェスリ神学の核心

アウトラー (Albert C. Outler) は、ジョン・ウェスリを「民衆の神学者, a folk-theologian」と呼び、「『キリスト者生活の本質』という古くからの課題に対して、彼独特で総合的な答えを与えた第18世紀アングリカニズムの最も重要な神学者」と評価する。<sup>(8)</sup> また、メソジスト神学を、「神の主権的な恵みをプロテスタントとして高調すること、神の救いの歴史における人間の役割についてのカトリック的強調点とを、独自のスタイルで考察する神学」と表現する。<sup>(9)</sup>

*Conflict and Reconciliation* なる良著を世に問うたターナー (John Munsey Turner) は、<sup>(10)</sup> ウェスリ神学の核心は、「エプワースの4辺形 (Epworth Quadrilateral)」として叙述されてきたと紹介する。<sup>(11)</sup> 「①すべての人間は罪人である。②すべての人間は救われ得る。③すべての人間はこの救いを理解し得る。④すべての人間の救いは完成され得る。」の4辺形である。また、「エプワースの3角形 (Epworth Triangle)」とも表現される。<sup>(12)</sup> ①神の普遍的な愛の絶対性——ここに、ウェスリに流れ込んでいる国教会アルミニウス主義思潮が見られる。いわゆる“Optimism of Grace” (E. Gordon Rupp) である。<sup>(13)</sup> ②個人の信仰の必要性——位置や立場の変化だけでなく、生活や状況の革新を個々人にもたらす。③神の恵みの無限性、の3角形である。

ウェスリ神学の核心をめぐる多くの研究の中で、最も注目すべき論述の一つは、ゴードン・ラップ (E. Gordon Rupp) のそれであろう。<sup>(14)</sup> 彼はまず、ウェスリ自身が生涯、語り続けた以下のことばを掲げる。「メソディズムとは何か。……メソディズムは、いわば古い宗教、聖書の宗教、初期教会の宗教、イングランド教会の宗教である。この古い宗教は、……愛、つまり神

の愛と全人類の愛以外の何ものでもない。」<sup>(15)</sup> ラップは、「救いの秩序」をチャート化したピューリタンや、神との合一における魂の状態に注目した神秘思想家と、ウェスリ神学がいかに隔たっていたかを示す。

ラップによれば、ウェスリ神学は求心力の働く円にたとえられる。円の中心は、申すまでもなく、父、子、御霊なる三一の神でありたもう。この中心を求めて、4重奏の楽器のように互いに関わり合いつつハーモニーをつくり出す四重の中心的教理、即ち、信仰義認、新生、聖霊による確証、全き愛が存在するとされる。<sup>(16)</sup>

筆者は一連の小論において、ウェスリが「聖書のホーリネス」と総称した、ラップのいう上記の教理に「先行の恵み」なる一項目を加えて考察し、ジョン・ウェスリの神学的遺産をめぐる歴史的、神学的な総合的研究の試論とした。

## II ウェスリの信仰義認論の背景

### 1. 初期ウェスリと後期ウェスリ

ロジャーズ (Charles A. Rogers) はデューク大学への学位請求論文において、ウェスリの生涯と著作には二つの明瞭な神学的立場が認められるとし、初期ウェスリと後期ウェスリ、更にその中間に神学的転換期を区分する試論を展開している。以下、彼の所説に従って説明したい。<sup>(17)</sup>

初期ウェスリとは、彼がオックスフォード大学の学生となり、続いてリンカン・コレッジのフェローに選ばれ、更に国教会司祭として奉仕を始めた時期のウェスリを指し、1725年—35年が設定されている。1725年以前は、家族サークルの影響下、彼の性格と思想的形成の基礎が築かれた時期である。1725年頃は、彼の神学書読書量の増加と共にその理解力も強まり、聖職者としての将来を考えていた時期なので、初期ウェスリ形成の開始期に選ばれた。

初期ウェスリは、救いの信仰のことを、記述された真理に適切な権威を付与する人間の内的

同意 (inward assent) と見ている。救いの段階には、洗礼に伴う再生と、神の先行の恵みにより人間の側に与えられる善行追求とがある。善き業を追い求める生活を通して、再生された人は信仰と聖性に成長し、神に受け入れられる者への報いとしての永遠の至福に至ると考えられていた。従って初期ウェスリには、信仰の人格的で個人的な側面への強調、とりわけ、信仰義認の高調が少ない。しかし、ここで留意しなければならない点がある。それは後期ウェスリが、初期における自分の信仰内容を反省して叙述する時、その自己批判や内省ゆえに、より厳しい内容となり過ぎている点である。人の信仰や思想には、瞬間的飛躍や覚醒による非連続の面とともに、複雑多岐な連続面が存在することも事実ではあるまいか。

さて、ウェスリ神学は彼の生涯がそうであったように、1736年—38年の2カ年余りに、決定的な転換期を迎える。決定的変化とは、心の聖潔もしくは聖化と、恵みによって守られ力づけられた生活とは、まず、神に受け入れられることを必然的前提とすることを発見して、いわゆる神学的大転換をしたことであった。信仰義認という聖書の福音の真理の再発見と申してもよい。1738年の初めに、彼は、神の赦しと罪人を受け入れたもう恵みとは、人間の側の服従や聖潔の業に基づくものでなく、ただ神のあわれみのみによることを知った。神のあわれみは、キリストの贖いの御業の功績により、信仰のみを条件とするという福音主義的な立場を確立するに至った。

年代的に見れば、1738年以後53年間に及ぶ、巡回伝道者、説教者、神学者、ソサエティの指導者としての歩みが、後期ウェスリを形づくる。後期ウェスリとは、上述の救いの福音に関する新しい神学的発見を宣べ伝えたウェスリのことである。信仰復興運動の興隆と彼の神学的熟成とは、車の両輪のように進展して行った。

後期ウェスリにおける二つの神学論争に注目したい。モラヴィア派との論争の口火 (1739年—41年) は、遂に自派分裂を来らせるに至っ

た。より詳しくは次項で考察するが、モラヴィア派の神学全般が凡ゆる意味での善行を拒否し、「恵みの手段」が「義とする信仰の賜物」を受ける前に有効であるとの主張を否定したことに対し、ウェスリはその立場を「静寂主義 (Quietism, stillness)」として斥けざるを得なかった。

もう一つの論争は、極端な神的決定説に立つカルヴィニズム陣営との対立から起った。ウェスリは、キリストの普遍的贖罪の御業への信仰を高調することで論陣を張った。(この論争については、追って詳細に論述したい。) これらの二論争を経ながら、ウェスリは彼独自の神学を形成していくこととなる。

以上で初期から後期に至るウェスリの神学的発展を鳥瞰したが、次に焦点を、彼の信仰義認論の背景へ当てた後、彼の義認論そのものへとしばって行きたい。「背景」の考察は、まず、ウェスリとモラヴィア派との出会いを概観し、更に、イングランド宗教改革からウェスリに至る信仰義認論の変遷を跡づけることをもって構成される。

2. ウェスリとモラヴィア派との出会いから  
ジョン・ウェスリの信仰義認論を知るためには、まず、その背景として、ウェスリとモラヴィア派との交流についてよく理解しておくことが前提となろう。

ジョン・ウェスリとモラヴィア派 (より正確には *Unitas Fratrum*) との神学的関係については、多くの研究が世に問われている。<sup>(18)</sup> ヒンソン (Leon O. Hynson) はその関係を三つの段階に分けるが、彼に従って各段階における義認論を中心とした神学的諸問題を略述したい。<sup>(19)</sup>

#### (1) 第1段階 (1735—38年)

第1段階は、シモンズ号によるジョージアへの航海中、嵐の中でのモラヴィア派信徒の死を恐れぬ平安と勇気ゆえに、ウェスリが心からの尊敬を彼らに対して抱いた1735年10月に始まる。「彼らは、主のために凡てをすて、主に学

び、柔和にして謙虚、この世に対して死んで、信仰と聖霊とに満たされている。」との敬慕は、神学的対立を越えて終生変らなかつたと云う。<sup>(20)</sup>翌36年2月、サヴァンナ到着後、シュパンゲンベルク (August Gottlieb Spangenberg, 1704-92) との有名な対話があった。ウェスリは、「イエス・キリストを知るか。」との問いに、「世界の救い主」と答え、「彼があなたを救われたことを知るか。」との問いに、「彼はわたしを救うために死なれたと思う。」と答えている。質問者の満足感とは逆に、<sup>(21)</sup> 回答したウェスリの方は自分の答えに空しさを感じたと記している。<sup>(22)</sup>

1737年7月31日、ジョージア到着18カ月目に、ウェスリはシュパンゲンベルク宛31カ条の疑問点を問い、モラヴィア派の神学と教会生活を質している。このあたりに、疑問点をあくまでも問いただしていこうとする、ウェスリに終生変らなかつた傾向の片鱗がうかがえる。以下は、シュパンゲンベルクの答えの要点である。①回心は瞬間的であるが、その過程は漸進的である。②信仰の定義は、ヘブル11:1で答えられている。③「恵みの手段」の必要性が肯定され、信仰は行いによって完成されると明言している。④見える教会が、「使徒的秩序と教憲に結び合わされ、キリストの御霊に保たれた人々のソサエティ」と定義される。⑤さんびは祈祷の形式をとるが、自由な祈りも尊重されている。⑥社会的責任をめぐる問答が続く。以上の中で、特に、両者による「恵みの手段」の肯定を確認しておきたい。

1738年2月7日、帰国した傷心のウェスリは、ロンドンにおいてベーラー (Peter Böhler, 1721-75) と出会った。<sup>(23)</sup> 彼らは間もなくオックスフォードへの旅行に出るが、“Mi frater, mi frater, excoquenda est ista tua philosophia.” (兄弟よ、兄弟よ、あなたの哲学は追放されねばならない。) とのベーラーの忠告 (ベーラーにとってウェスリの弱点は、すぐ理性に訴えて論議を重ね、なかなか納得しない点にあった!) は、ウェスリには「何のことかさっぱ

り分らぬ」ことであつたらしい。<sup>(24)</sup> しかし、「信仰を持たぬまま何を説教できるのか」との彼の悩みに対してベーラーが与えたことば、“Preach faith *till* you have it; and then *because* you have it you *will* preach faith.” (信仰をもてるようになるまで、信仰について説教しなさい。信仰をもったら、信仰をもっているのだから、信仰が説けるはずです。) との勧告は適切であつた。ウェスリは直ちに死刑囚に対し、信仰のみによる救いを説教する率直さを持っている。<sup>(25)</sup>

同年4月22日、彼らは再会した。ウェスリは「この時わたしは、ベーラーが語った信仰の意義、つまり国教会の用語をもってすれば、『人はキリストの功績により罪が赦されて神と和解させられる、という確信を神につなぐこと』に何の反論ももっていなかった。」と記す。<sup>(26)</sup> ここで、信仰義認の福音の受け入れの時がウェスリに迫っていた事実と、彼が「国教会の用語をもってすれば」と特記して、ベーラーの説く福音が、実は自国の改革者たちが説いた福音そのものであることを認識し始めた事実とを確かめておきたい。にもかかわらず、この信仰が瞬間的に自分に与えられることについて、彼はなお半信半疑の状態であつた。ベーラーはツィンツェンドルフ伯 (Nikolaus Ludwig Zinzendorf, 1700-60) にこれらの会話を伝え、伯自身ウェスリのことを、「われらの教会の息子」と呼んでいたと伝えられている。対立を越えた友好のしるしである。

5月8日付けのベーラーの手紙は、「ぐずぐずせず、あなたのイエス・キリストを信じよ。憐れむべき罪人への主の約束を心に刻め。主は多くの人々への業をあなたのためにもしてくださる。」と強い調子で説く。そしてウェスリ自身の筆は、信仰義認の福音を、恵みにより信仰を通して聖霊の業として受ける直前の自らの姿を、以下のように叙述している。(このくだりは、単なる事実の羅列でなく、彼の神学思想的転換への洞察に満ちた叙述なので、少し長いが引用することとした。)[わたしの云う信仰



とは、神を信じるというだけのものであって、キリストを信じる信仰、つまり、キリストを通しての信仰のことではなかった。更にわたしは、この意味における信仰を全的に欠いていることに気付かず、この信仰を十分にはもっていないと考えていたにすぎなかった。……ペーター・ペーラーが、ただひとりのキリストを信じる真の信仰は、罪の征服と罪を赦された自覚からくる不断の平和という不可分の二つの果実を伴うと説いてくれたとき、わたしは新しい福音に接した驚きに満たされた。……わたしは説得されて、神の恵みによりこの信仰を徹底的に追い求めることを決心した。それには①全体的であれ部分的であれ、自分の業、つまり自分の義に依存することを全く否定しなければならない。わたしは若い頃から、無知であったとは云え、救いの望みを自分自身の義にかけてきた。②恵みを受ける凡ゆる手段をたえず講じるとともに、不断の祈りをもって義とされて救いに入れられる信仰を得ねばならない。この信仰とは、義とされる信仰、救われる信仰、即ち、わたしのために流されたキリストの血を全的に信じて、彼がわたしのキリスト、わたしの唯一の義、唯一の聖、唯一の贖いであると信じる信仰のことである。<sup>(27)</sup>

ウェスリはペーラーたちとの交流により、今や信仰の意義を、信仰のみによる義認という唯一の道において発見した。「恵みの手段」や善行も義認を獲得する功績や業とはならない。ウェスリは「善人が善行を為す」とのルターの原則に従う。「わたしのすべての業も、義も、祈りも、それ自体のための贖いを必要とする。神は聖でわたしは不聖、神は焼きつくす火でわたしは焼きつくされるべき完全な罪人である。」<sup>(28)</sup> 第一が信仰であって次に善行がうみ出される。信仰の実としての善行は、救いの恵みに与った者の表現そのものである。罪人が「恵みの手段」を用いることは、後述する「先行の恵み」のもとで有効であるが、それが功績となることは絶対にあり得ない。

信仰の本質への見方を変えられて、ウェスリ

はこの信仰への確信を与えられた。5月24日のアルダスゲート体験は、ペーラーの助言のように「この信仰は賜物、つまり神からの無料の賜物で、真剣に求めているすべての魂に与えられるもの」であることが確信され得た体験であった。この体験直後の試練のときにも、彼は自分の体験が、自身の意識や感情の変化ではなく、イエス・キリストによる救いのリアリティに根ざした喜びであったことを確認させられている。<sup>(29)</sup>

ウェスリはペーラーたちモラヴィア派によって、①信仰の真の本質について、②信仰は瞬間的に与えられる神の賜物であること、③信仰の教理は確証の教理へと拡大されていく、の3点を学んだ。

以上の第1段階はマリエンボルン (Marienborn) とヘルンフート (Herrnhut) への3カ月旅行をもって終ることとなる。1738年7月4日、ウェスリとインガム (Benjamin Ingham, 1712-72)<sup>(30)</sup> はマリエンボルンに着き、以後、モラヴィア派のリーダーや神学者と交わった。言語の不自由さも介在したが、インガムとは違ってウェスリは、彼らへの客観的観察の姿勢を崩していない。「人は義とされ得るか、しかもそれを知らずにおれるか。」という、ツィンツェンドルフ初期の説教に注目した。この偉大な指導者は、義認が赦罪を意味することを強調した。義認は瞬間的に知り得る神との平和であるが、いつも平安に満たされているとは限らない。長い間、当人が義とされたことを知らぬ場合もある。他の人々が本人よりも早くその事実を悟ることすら起り得る。共同体が個人の理解を超えるという神学である。

ウェスリは、ペーラーとツィンツェンドルフの相違を探り当てていた。ペーラーは、人がそれを持つと知ることなしに、救いとか神との平和とかを持ち得ないと強調していたからである。ツィンツェンドルフは義認と新生を同一視したが、ウェスリにとって法的義と現実的義との差異は的確に受けとるべきものであった。

デーヴィット (Christian David, 1690-1751)

との出会いも特筆すべきものであった。ウェスリは彼の説教を4回にわたって聞く機会を得た。<sup>(31)</sup> ダーヴィットは、義とされたばかりの弱い人々と、聖霊の絶え間ない宿りを受けている人々とを区別した。彼はまた、義認を「われわれの外」<sup>(32)</sup>の何ものか、つまり、キリストの血と義という客観的リアリティに置き、「転嫁の義(an imputed quality)」と表現し、善の法的属性を強調した。人間の側には、人を神と結びつけるものは何もない。存在するものは罪だけであって、それが神と人をへだてる。逆説的ではあるが、その罪のゆえにキリストは贖いの死を死なれた。人は信仰によって神との和解を得る。信仰は、心に生きる神からの賜物である。「人や本から学んだ頭脳の信仰は役立たぬ。」<sup>(33)</sup>とは、ダーヴィットから得た教訓である。他のモラヴィア派と違って、ダーヴィットは「信仰の力量の相違」を説き、それは後年、ウェスリの論点の一つとなった。

“giving for us”は、ウェスリにおける“living in us”の強調となるが、それはまた、“giving for us”へとかえる。“for us”から“in us”へ、“in us”から“for us”へと「福音信仰の健全な循環」がないならば、それは単なる“in us”の強調であって律法主義化を招きかねない。

ウェスリは、『日記』にモラヴィア教会の『教規』を付記したが、<sup>(34)</sup>それは彼が深く彼らの教会観を始め、“band”組織などを学ぶ好例である。信仰のみによる義認、恵みの瞬間的御業、信仰者の教会の概念、義認と確証の区別、霊的生活の諸段階、確証の教理など、ウェスリがモラヴィア派に負うところは大きくであると云わねばならない。

## (2) 第2段階(1739年—40年)

両者に交わりが絶えていたしばらくの期間を経て、出会いの第2局面は、ウェスリによるモラヴィア派への敬愛と共に批判によって始められた。『日記』の第4部冒頭には、以下のようなモラヴィア派へのことばが綴られている。

「わたしが長い間、誓くのをためらってきたのは、わたしがあなたがたを愛していたからであり、あなたがたを何事につけても悲しませなくなかったからであり、この世の何にまさっても望んでいる一致を妨げる恐れを抱いていたからである。……わたしの心をあなたがたにつなぐものは、あらゆる場合、あなたがたの中で教えられた教義の卓越性だ。あなたがたの信仰の基本は、『神はキリストにあって世をご自身と和解せしめたもう』ことにある。あなたがたは、義認の起源としての神の恵みと、義認の条件としての信仰とを宣べ伝える。また、あなたがたは、『義と平和と聖霊の喜び』という信仰のすばらしい果実を証し、これらによって『神から生れた者は、罪を犯すことができない』と論じる。わたしは、あなたがたの多くの人々のうちに現臨される神をさんびする。……地表にひろがる外的な罪から、あなたがたを救ってくださる神をさんびする。……わたしはあなたがたを敬愛する。』<sup>(35)</sup> こう述べた後で、モラヴィア教会の信条や教会組織と活動などを敬愛の理由として挙げている。

にもかかわらず、この記述は破られた両者の関係を回復したいとの願いから記されたものであった。破綻は、モルター(Phillip Henry Molther, 1714-80)なる人物との論争に始まった。モルターはペンシルヴェニアへの途次、2週間、ロンドンに滞在しただけであったが、彼の説く「恵みの手段を止め、ただ神を待ち望む静寂主義(stillness, quietism)」は、ロンドンのソサエティの中にはびこった。モルターは疑いや恐れが存在は信仰の欠如を示すので、信仰の確信に満たされるまでは聖餐を慎しめと指導した。ウェスリは群れの信徒の多くに、恵みの手段への疑いや混乱や拒絶を見るに至った。事態は解決のために急を要する状況であった。

一体、信徒は確信に満たされるまで聖餐できないのか。信仰は疑いや恐れの中にあっては存在しないのか。今や、以下のようなウェスリの神学的認識と実際の指導の基本的な型が現れた。①主の晩餐は主の命令であり、神に用いら

れる恵みの手段である。②通常的には、これによって神の恵みが与えられる。③信仰のない者も、神が命じられた恵みの手段を用いつつ、神の賜物としての信仰を待ち望むべきである。

ウェスリによれば、モルターは、人が完全に再生され完全な信仰の確信に満たされるまでは、どの程度の信仰をも持ち得ないと断じているとされる。それは静寂の中でひたすら神を待ち望む道であった。聖餐、御言の学び、祈り、断食、集会出席などの恵みの手段を用いる時、救いに関してこれらの手段によりすがることが生じてしまうと恐れた。神のみを待ち望む者は、何ものをも救い得ないこれらの一時的な善、霊的な善を待つべきではない。これがモルターらの論点ではなかったか。

ウェスリは、「神がこれらの恵みを通常において、不信仰な者のために用いたもうと信じる」ゆえに、これらの手段を用い尽そうとした。ウェスリは神の恵みの賜物として手段を用いるならば、それは「手段によりすがること」を意味しないと教えた。これらの神学的討論が明らかにするところは、ウェスリが信仰による義認の独自性を高調しつつも、「義と認められた者の善行」という観点にも考察を拡げてバランスのとれた見解を示した点である。フエーレイン・ソサエティで論争が起こり、ウェスリは行為義認へ逆戻りする危険性をはらむと批判されつつも、静寂主義の悪弊を打破しようと努める。ここで論点を整理すれば以下になるろう。

① 第1の論点は、恐れや疑いの中での「弱い信仰」は信仰でないのかにあった。ほとんどの入信者はそのような状態にある。弟子たちさえ「信仰薄き者」と呼ばれたではないか。ウェスリは信仰と共に信仰の力量にも注目する。

② 彼はモルターが説く、キリスト者の唯一の義務は信仰なりとの宣言を批判する。モルターの信仰観を、「新約聖書の中には『信じること』以外に戒めはなく、それ以外の義務は課せられておらず、人は信じる時、聖書に命じられている何ものにも拘束されることなく、又、こ

れらのことを行なう責任もなく、儀式を守る必要もない。従って祈祷に拘束されず、祈る責任もなく、聖餐に与ったり、聖書を読んだり、聴いたりする責任もなく、しもべではないので、気の向くままに、これらを守ってもよく守らなくてもよい」教えだと要約している。<sup>489</sup>

ウェスリにとっても、信仰はそれを待ち望む人々に神が与えてくださる「賜物」である。神の戒めに従ったという、人間の実績による「獲得した業」ではない。しかし彼はモルターの思想の中の、「ただ待ち望む」という一点を衝く。キリスト者は神の律法に信仰と喜びをもって従わねばならない。神は贖われた者に、聖霊による力と愛と慎しみの霊を与えて、神が命じられたことを完成する恵みを与えてくださる。かく信じる信仰こそ、真に高価な恵みの賜物ではないか。実行してほしいことを神は命じておられる。実行できる力を恵みの賜物として与えておられる。

③ モルターたちは、未信仰者によって用いられる恵みの手段は何もなく、信仰者にとってもそれらは無価値であると説く。キリストが唯一の恵みの手段であると強調する。一方、ウェスリは「キリストの律法」と「自由をもたらす完全な律法」についての神学的考察を怠らない。「恵みの手段」とは聖書中の用語ではないが、聖書の福音内容を真実に示すものに他ならない。それは先行の恵みの下にある、まだ義とされていない求道中の人々にも、信仰者にも、等しく神の恵みを伝える手段である。この静寂主義をめぐる論争を、ウェスリ自身はルター派の「律法を福音との緊張関係で扱う」見方よりも、カルヴァンの「律法の第三用法（神の義を示して人間の不義を教える第一用法、罪の抑制としての第二用法に比して、信者を服従へと『促進し、怠慢を遂斥し、……奨励の力を有する』用法）」に近いものである、と位置づけるだけで済ましてしまえないものがある。ウェスリにとって、主の晩餐は「強め、確認すること、(confirmation)」を越えた、「神への回心、翻身を導く戒め、(converting ordinance)」であ

った。聖礼典の恵みを受けて、多くの人々が神に向って心を動かされ、罪の確信に至る事実を彼は訴え続けた。「イエスの使徒たちは、回心していなかった者も、全的な意味で信仰者でなかった者も、主の晩餐に与るように命じられたではないか」と主張した。この基本的確信は、陪餐をめぐる具体的問題での後年の指導変更(求道者による陪餐は、気儘なものとなり易く無秩序をうみ易かった)にもかかわらず、不変なものとして一貫していた。

第2段階は、ウェスリがフェッターレイン・ソサティから退会した時点で終るが、以下の事柄を付記しておきたい。①ウェスリの「恵みの手段」観には、モルターとの論争以前にさかのぼる長い背景がある。②モルター以外の人々も静寂主義を説いた筈であるが、批判攻撃がモルターのみに向けられた事実を覚えておきたい。そのことからモルター自身の品性や言動が想像できる。③ウェスリはモルターという人物だけでモラヴィア派全体を批判したのではない。彼は自らを「イングランドとモラヴィアとの両教会の間に交わりを開くための選びの器」と信じていたが、彼らの静寂主義神学の底流と、義認と聖化との関係についての所説には賛同できなかった。

### (3) 第3段階 (1741年以降)

1741年5月2日、ウェスリとペーラー及びシュパンゲンベルクとの対話の中で、「キリストにある新創造」をめぐる神学的対立が再燃した。<sup>(37)</sup> 義とされた者は新創造である。「しかし」と、ペーラーたちは注釈する。彼の中の古い自我は死に至るまで残存している。古き我から解放されるのは死の床においてである。彼らはここでモラヴィア派神学の一般的見解を代表しつつ、ウェスリの説く現実的生活のただ中において「全身体的に、個人的及び社会的に」注ぎ込まれ完成されるキリストの義(an infused righteousness)を拒否し、「転嫁の義(an imputed righteousness)のみ」を高調した。シュパンゲンベルクは著書 *Idea Fidei Fratrum* において、聖化は義認に含まれる一部分にすぎ

ないと説く。彼らの神学の当然の帰結と云えよう。モラヴィア派は imputed に固執し、ウェスリは imputed と infused の両者を考察したのである。ペーラーはこれらの議論を虫歯にたとえた。虫歯は少しづつ削り取ることは可能でも完全に取り去ることは不可能であるとして、「その根は残って時々、痛みを起こす」と語ったと云う。

この課題は、1741年9月3日、Gray's Inn Walks におけるウェスリとツィンツェンドルフとの討論の主要テーマであった。ウェスリは会談の内容をラテン語で記して訳そうとしなかった。<sup>(38)</sup> ツィンツェンドルフは席上、その前年8月8日付のウェスリの書簡「ヘルンフートにある神の教会への手紙」に言及した。<sup>(39)</sup> ウェスリはこの手紙で、自分が神学と倫理の核心を何と考えているかを明らかにしようとしている。人間の心は本当に罪から潔められるのか、新約聖書には、信じることを以外、何の戒めもないと本当に記されているのか、迫害や十字架を負うことを避ける生活をめぐって、などに触れている。モラヴィア派のこの世への順応、誇り高ぶりや閉鎖性を衝いて、「知ることなしに義とされる信仰」の持つ問題点を批判している。

両者はキリスト者の完全と恵みの手段を中心主題として語り合った。ツィンツェンドルフは、現世における完全は誤謬中の誤謬だと断じる。キリストのみが唯一の完全だからである。完全はキリストの中にのみ存在する。ウェスリは、「では、キリストによる聖化の恵みとは何か」を問うが、答は「キリストの中においてのみ聖化されるので、キリスト者自身の中に聖化はない」とくりかえされるのみである。ウェスリは神のホーリネスにおける恵みの成長を問うが、ツィンツェンドルフは、人が義とされる時、キリストの中で全く聖とされると答える。「より多く、より少なく」という程度は、潔さには存在しないと答える。「瞬間に聖化と義認が完成される。潔さに増減はない。義認において人は愛の内に全うされるが罪から自由なのではない。3日間で精錬される金は、1日目も2

日日も3日日も同じく金である。日々新しくされるが同じ金である。」と答える。教師ツィンツェンドルフは、生徒ウェスリに対して再考を促し、ウェスリは謙虚に熟考を約束するが、両者の相違は明白である。相違点は、キリストではなく、キリスト者生活の現実に、恵みではなく、恵みによる信仰者の成長に、義認という一点でなくて義認と聖化とのかかわりに存在すると云えよう。

Gray's Inn Walks 討論は、結局のところ決裂に終わった。モラヴィア派はウェスリによる同派の神学の総括は正確でないと指摘し、ツィンツェンドルフの全著作を読まず文脈を追わない攻撃であると批判した。ハットン (James Hutton, 1715-95) の如きは嫉妬による悪口だと断じ、他の人々もウェスリ神学を神の恵みを軽視した「神人共働説, synergism」だとききおろした。ヒルデブランド (Franz Hildebrandt) から現代の学者によるこの討論の評価もまちまちである。<sup>(40)</sup>

論争というものが尖鋭化するのには止むを得ぬとしても、われわれとしては、ここでこの討論が示す積極的な意味を明らかにしておきたい。①両者とも、この討論を通じてエキュメニカルな「キリストにある一致」を求め続けたという点である。ウェスリがモラヴィア教会との関係修復のために、前述の『日記 第4部』の出版を3カ年も遅らせた事実を忘れてはならない。ツィンツェンドルフがウェスリの名を伏せた上で間接的に彼を批判した事実をも覚えておきたい。その神学的相違にもかかわらず、彼らが終生抱き続けていた「愛によって働く信仰」こそ、彼らの真実でひそかな底流と認め得るものである。②論争はその論点をも鮮明にしたという点である。両陣営とも、自らにとって最も重要な「福音のチェック・ポイント」を分け合ったと云ってよい。モラヴィア派神学にとっては、「信仰のみ」を高調する余り、「恵みや信仰が生活や倫理とどうかかわるか」という問題を空洞化してしまわないかという問題点がある。「恵みや信仰のみ」が空念仏となってしまう、

生き生きとした「恵みと信仰の現実的な証し」がないならば、それらは結局は無に等しくなる。他方、ウェスリ神学にとっても、その神学的基調が恵みに貫かれているとは云え、ホーリネスや完全などに力点がおかれるために、人間中心主義化や律法主義的変質を来たすとするならば、それはペラギウス主義的逸脱をはらむものと警戒されるのが至極当然であろう。

#### (4) 要約

ジョン・ウェスリの信仰義認観に対してモラヴィア派が与えた影響は大きい。しかし特筆すべきことは、モラヴィア派の人々はウェスリに宗教改革者たちの信仰義認観を伝えたということ、つまり、ウェスリ自身をして、祖国イングランド宗教改革者たちの信仰義認観という基盤に立ち返らしめた上で、その土台の上に彼独自の義認観を築かしたという事実である。彼は終生、イングランド教会の聖職者として立ち続け、母教会以上にすぐれた教会を知らぬと断言してはばからぬ人物であった。信仰義認の視座を中心にして、ウェスリをして自己同一性 (アイデンティティ) に目覚めしめる「手助け」をした人々こそ、モラヴィア派の人々ではなかったか。ウェスリは改めてイングランド宗教改革者の『説教集』を、開かれた目で読み通しながら、神が祖国に既に与えておられた信仰義認という救いと恵みの神学の遺産を知り、その信仰的礎石に立ち、彼独特の神学で福音の本質を説き続けた。(因みにウェスリに与えたモラヴィア派独自の神学の影響は何かを問うならば、それはむしろ、「聖霊による確証の神学」であったと云うべきであろうが、その事はまた、順を追って論じていくこととしたい。)

興味を惹かれるもう一つの事実を記しておこう。1781年、『メソジスト略史』を綴ったウェスリは、あたかも1739年—41年というモラヴィア派との対立時期がなかったかのように、友好関係のみを特筆している。これと対照的なのは、グラディン (Arvid Gradin, 1704-54) が1743年に著述し、シュパンゲンベルクが1752年に出版した『モラヴィア教会史』である。彼ら

はジョン・ウェスリについて全く触れていない。彼らの著書は論争と対立から時期的に近かったので、反感の傷口はまだ癒えていなかったのかも知れない。また、同教団の人々は、ウェスリらを見下ろすことを申し合わせていたのかも知れない。いずれにせよ、ウェスリにおける「信仰と信仰者による善き業とのかかわり」や「愛によって働く信仰」が本物であったことを実証する、多くのエピソードの一つであると考えない訳にはいかない。

われわれはモラヴィア派から目を転じて、ウェスリが彼らを通して再発見し、再解釈していった第16世紀のイングランド宗教改革者から始めて、ピューリタニズムの信仰的系譜を経つつ、ウェスリと同時代の人々に至るまでの信仰義認論の流れを概観することにした。このようなウェスリ神学の背景に関する考察なしには、ウェスリ神学における、彼独特の信仰義認論を正しく把握し難いと考えるからである。

#### 注

- (1) Outler, Albert C., ed., *The Works of John Wesley* (Bicentennial edition, 以下, BE. と略す), vols. 1-4, Sermons, Nashville, Abingdon Press, 1984-87.
- (2) ウェスリ神学の独自性に関する最近の論文に, Maddox, R. L., "Responsible Grace: The systematic nature of Wesley's theology reconsidered", *Quarterly Review*, pp. 24-34, 1986, Horst, M. L., "Experimenting with Christian Wholeness: Method in Wesley's theology", *Ibid.*, pp. 11-23, 1987, がある。
- (3) 観点は異なるが, 関根正雄「義認と聖化——聖書神学思想史の立場から——」日本聖書学研究所編『聖書学論集』18, 東京, 山本書店, 1983年, 53頁-75頁に教えられた。分野は異なるが中村雄二郎の一連の著作, 『現代情念論』, 東京, 勁草書房, 1962年, 『感覚の覚醒』, 東京, 岩波書店, 1975年, 『知の変貌』, 東京, 弘文堂, 1978年, 『精神のトボス』, 東京, 青土社, 1979年, 『考える愉しみ』, 同, 『パトスの知』, 東京, 筑摩書房, 1982年, 『術語集』, 東京, 岩波書店, 1984年, 『哲学的断片』, 東京, 青土社, 1986年に思想的刺激を受けた。
- (4) Hildebrandt, F., & Beckerlegge, O. A., eds., *The Works of John Wesley*, (Oxford edition) vol. 7 (A Collection of Hymns for the use of the People called Methodists), Oxford, Clarendon Press, 1983 とその序論を参照すること。
- (5) 小林章夫『チャップ・ブック——近代イギリスの大衆文化——』, 東京, 巖々堂, 1988年が参考になる。
- (6) その代表的なものに Wainwright, G., *Doxology*, London, Epworth Press, 1980 がある。著者は英国メソジスト教会の神学者で, 本書にはウェスリへの言及や引用も多い。
- (7) Jones, C., Wainwright, G., Yarnold, E., eds., *The Study of Liturgy*, London, S.P.C.K., 1978 など。なお, 本年, 姉妹篇の *The Study of Spirituality* も出版された。
- (8) Outler, A. C., "The Place of Wesley in the Christian Tradition", Rowe, K. E., ed., *The Place of Wesley in the Christian Tradition*, Metuchen, N. J., Scarecrow Press, 1976, p. 14.
- (9) Outler, A. C., "Methodism's Theological Heritage: Study in Perspective", Minus, Jr., P. M., *Methodism's Destiny in an Ecumenical Age*, Nashville, Abingdon Press, 1969, p. 49.
- (10) Turner, J. M., *Conflict & Reconciliation: Studies in Methodism & Ecumenism in England 1740-1982*, London, Epworth Press, 1985.
- (11) 前掲書によれば, この記述は, Fritzgerald, W. B., の1903年の論述にまでさかのぼり得る。1920年代に, 人々の口にのぼるようになったと云う。
- (12) Turner, J. M., *Introducing Theology*, London, Epworth Press, 1975, pp. 78-75, "John Wesley, People's Theologian", *One in Christ*, December, 1978, pp. 328-339.
- (13) Rupp, E. G., *Principalities & Powers*, London, Epworth Press, 1952, pp. 76-93.
- (14) Rupp, E. G., *Religion in England 1688-1791* (Oxford History of the Christian Church), Oxford, Clarendon Press, 1986.
- (15) *Ibid.*, p. 416.
- (16) *Ibid.*, pp. 416-429.
- (17) Rogers, C. A., "The Concept of Preventive Grace in the Theology of John Wesley", A Ph. D. dissertation, 1967, Duke University, Durham, North Carolina, 1967.
- (18) Towlson, C. W., *Moravian & Methodist*, London, Epworth Press, 1957, Langton, E., *History of the Moravian Church*, London, George Allen & Unwin, 1956, Thompson, C. A., "Mo-

- tifs in Eighteenth Century Evangelical-Pietism", A Ph. D. dissertation, 1974, Brown University, Providence, Rhode Island, 1974, Stephens, W. P., "Wesley & the Moravians", Stacey, J., ed., *John Wesley : Contemporary Perspectives*, London, Epworth Press, 1988.
- (19) Hynson, L. O., 'John Wesley & the "Unitas Fratrum": A Theological Analysis', *Methodist History*, Oct. 1979, pp. 26-59.
- (20) Ward, W. R., & Heitzenrater, R. P., eds., *The Works of John Wesley* (BE), vol. 18, (Journals & Diaries I <1735-1738>), Nashville, Abingdon Press, 1988, p. 312.
- (21) Hynson, *op. cit.*, p. 29.
- (22) *The Works of John Wesley*, vol. 18, p. 146.
- (23) *Ibid.*, p. 223.
- (24) *Ibid.*, p. 226.
- (25) *Ibid.*, p. 228.
- (26) *Ibid.*, p. 233.
- (27) *Ibid.*, pp. 247-250.
- (28) *Ibid.*, p. 242.
- (29) *Ibid.*, pp. 242-250.
- (30) インガムについては, Heitzenrater, R. P., *Diary of an Oxford Methodist Benjamin Ingham, 1733-1734*, Durham, Duke Univ. Press, 1985  
が良い手引きとなろう。
- (31) Ward & Heitzenrater, eds., *op. cit.*, p. 270.
- (32) *Ibid.*, p. 272.
- (33) *Ibid.*
- (34) *Ibid.*, pp. 291-297.
- (35) Curnock, N., ed., *The Journal of the Rev. John Wesley, A. M.*, vol. 2, London, Epworth Press, 1911, pp. 309-311.
- (36) *Ibid.*, pp. 354-355.
- (37) *Ibid.*, p. 451.
- (38) *Ibid.*, pp. 488-490.
- (39) *Ibid.*, pp. 490-495.
- (40) Towlson, *op. cit.*, p. 166., Hildebrandt, F., *From Luther to Wesley*, London, Lutterworth Press, 1951, pp. 199-200.